

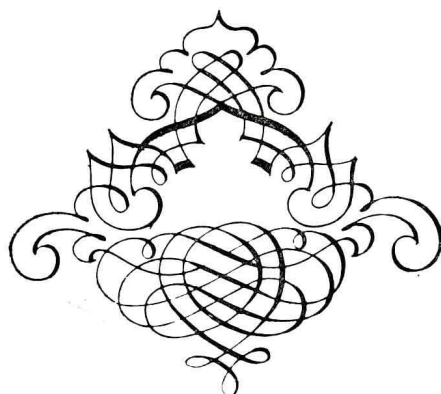


すばらしき
十六才

*Enchanted
Sixteen*

シビル・コンラッド
泉 知恵子訳

秋元書房



すばらしき十六才

定価 600 円

昭和 46 年 11 月 20 日 印刷

昭和 46 年 11 月 30 日 発行

訳 者

泉 知恵子



発行所

株式会社 秋元書房

東京都新宿区赤城下町42番地 〒 162

電話 268・0758 (代表)

振替東京 27047

乱丁・落丁のものは、本社またはお買いもとの書店にてお取りかえします

組版 西田整版・印刷 皆川印刷・製本 徳住製本

© 1971 Printed in Japan

目次

第一章	あたしは女優	五
第二章	ブラウン先生、さようなら	一五
第三章	パリ帰り	二五
第四章	夢去りぬ	三五
第五章	絶望	四四
第六章	イエール大学への招待	五五
第七章	恋と悲しみ	六七
第八章	ママの病気	七九
第九章	ホステス	九一
第十章	ひとりぼっち	一〇一



第十一章	アルバイト	二〇八
第十二章	夏休み	二一七
第十三章	花火	二二五
第十四章	ママの手紙	二三〇
第十五章	海の仲間たち	二三七
第十六章	土曜日の夜	二四四
第十七章	ブラインド・デイト	二五〇
第十八章	あらし	二六二
第十九章	遭難	二六九
第二十章	コニーのための星	二八〇

挿画 イルスレイ・ヴェルマ





す
ば
ら
し
き
十
六
才



主要人物

コニー（コンスタンス）・ファスター——この小説のヒロイン。
 今年十六才で、高校三年生。たいへんな空想家である。
 ブラウン——オークデイル高校の新任の英語の先生で、演劇部の
 指導もする。
 パッツ・ミッチェル——コニーのボーイフレンド。オークデイル
 高校の最上級生で、フットボールのキャプテン。
 ジェフ・フォスター——コニーの兄。イエール大学生。
 ヴァル（ヴァレリー）・パーカー——コニーの同級生で、いちば
 んの親友。
 アドリアン・パーカー——ヴァルの兄。パリに七年間留学してき
 た画家。
 デイブ・コリアー——イエール大学生で、ジェフのルームメイト。
 ジュリー・ローレンス夫人——コニーのアルバイトのやとい主。
 ジョンとドーデイという二人の幼い子供がいる。
 エイス・レスター——ダートマス大学一年生。アルバイトに海水
 浴場の見張り人をしている。
 ロージャー——エイスの友人で、乾物屋などでアルバイトをして
 いる。
 ジュディ・グラント——コニーが海岸で知り合った女の友だち。
 ジム・ローレンス——ローレンス夫人の甥。十九才でブラウン大
 学生。
 バート・ランドルフ——有名な映画俳優。

第一章 あたしは女優

コニーはベッドに起きなると、腕をおもいきりひろげて、頭をうしろにそらした。まるで足さきまで、ピロードやアーミン(髪の毛)につつまれているようなこちである。彼女は、一晚じゅう夢をみていた。おおぜいの観客の前に、豪華な舞台上で熱演していたのだった。いまのコニーにとって、この夢は、現実の問題であった。

先月、学校がはじまっていらい、コニーは、自分の将来について、悩みつつけてきた。十六才にもなれば、たとえ女の子でも、自分がなかに適していて、どういう道に進むべきかぐらいは、知っていなくてはならないし、きめておきたかった。その矢さきである。ブラウン先生に、ドラマ・クラブ(演劇部)へはいることをすすめられたのは。

コニーは、将来、女優になることを、ひそかに、心に誓った。全く運命なんて予想できないはずだわ、ひとりの教師が、わたしの人生コースを一変させることができるなんて——それにしても、今まで、わたしは、自分のこのすばらしい才能に、どうして気がつかなかつたのかしら、ブラウン先生は、きつと、ずつと前から、わたしの才能に目をつけていてくれたんだわ。学校の劇の出演に応募してみないか、と励まされたこともあったし、先週も、グレイ(十八世紀の英國の詩人、一七二六—七二)の『エレジー(墓畔哀歌)』を朗読したとき「コンスタンス、うまいぞー」とほめて下さった。あの言葉は、クラスのみんなが聞いてたはずだし、それに、先生がわたしにそそいだ目は、決して忘れられないわ。わたしの生涯のうちで、最も重大な瞬間だったんですもの。

夢想にふけていた彼女の寢室のドアが、二度もノックされた。

あら、たいへん、もう七時半かしら？ 布団をはねのけると、兎の襟くびつきの上っぱりを着て、鏡台に向った。機械的にブラシをとりあげ、みじかいブロードの髪の毛を、ふわりとふくらませてから、鏡に顔を近づけて、鏡の中の彼女を見つめた。いい血色だった。すっきりした青い眼にも自信があった。それから、両方の眼のふちをさわって

みた。この眼じりの小じわだけはちょっと気になるわ、あの新しいクリムをぬってみなくちゃ。

彼女は、母がたった今とのえておいた、化粧機のおおいのしわをのぼした。更紗はとてもきれいだ。でも、ママは、どうしてお裁縫なんか生きがいを感じるのか、コニーにはわからなかった。人生には、もっと有意義なことがあるはずなのに、まるで能なしみたいだわ。

十月の空が澄みわたっていた。彼女は窓のところに立って、わたしの人生の目標は、あのいちばん高いオークの木や楓の木よりも高いんだわ、とつぶやいた。

今日は、放課後のこつて、バツズのフットボールの練習をみる予定だった。ソックスと、モカソンの靴、こんな服装では、誰だって、熱心に応援して見るようには見えやしないわね。スエーターとスカートぐらいつけた方がいいかしら。ああ、そうそう、わたしには、もっともっと重要な問題があるんだわ、つまり「ドラマ・クラブ」よ。

彼女は、兄のジェフからのおゆずりの机から、教科書とノートを取りあげて、玄関に近い広間に行った。みんなは、もう朝飯のテーブルについているのかしら？ コニーは、階段のおどり場にある丈の高い鏡の前で、また立ちどまった。ここんところが、もう五ポンドほど、肉がおちれば、わたしは申し分ないスタイルになるんだがなあ……。

彼女は階段をとんで降りた。

「おはよう、母上、父上」

気取って、ラテン語をつかった。両親に接吻して、台所用のベンチに腰をおろすと、こんどは妹に、

「おはよう、スージーちゃん」

と情味をこめて言った。思いがけないやさしい言葉に、スージーは眼をみはった。

「ポビーさん、おはよう」

こんどは、ポビーに、やさしく声をかけたが、まだ六才のポビーは、食事に一生懸命だった。光沢のある赤毛の前髪にかくれた、そばかすのある額は、オートミールの皿の上に、おおいかぶさったままだった。

「ジェースとコーヒートのブラックだけでいいわ」



「コニーは、マッフィンを盛ったかごを、わきへおしやった。」

「ああこれ、ミス・プリマ・ドンナ（花形女優）」

父は、ナブキンをたたみながら言った。

「この家のなかでは、二度とブラック・コーヒーなんて言うんじゃないよ」

コニーは眉をしかめた。このごろ、わたしのすることは、何一つとしてパパの気にいらぬのね。じゃあ、こうすればいいでしょ、とミルクを三滴そそいだ。母は微笑していた。

「この子は、また新しい食養生法をはじめたのね、それに、朝は誰だって刺激剤がほしいものね」と言った。

なぜママは、いつもいつも、パパに対して、わたしの弁護ばかりしていなげばならぬのかしら？ わたしは、

あのブラック・コーヒーの液体が、おなかのなかを温めていくときの、甘い感触が、たまらなく好きだからなのよ。

スージーは、ひと切れのトーストを、コニーの鼻さきで振りまわした。「こんどはどんな食養生法なの？」

「うるさいわね」コニーは、スージーが、またジャムをスプーン一ぱい取るのを見ると、いらいらしてきた。

「わたしはいつも自分のスタイルに気をつけていなければならぬのよ、ことにいまは、ステイジに立つ準備をしているんですもの」と声をあらげて言った。

父と母は、びっくり仰天して、たがいに顔を見あわせた。

「それはまた、コニーの新職業にきまったのかね？」父がそう言ったとき、裏のドア・ベルが鳴った。

「やっ！ ビーターを呼んであげなくちゃ」とボビーは飛びあがった。「リンダだわ」とスージーもミルクの残りを呑みくだった。

母は二人を戸口まで送って行った。「ジャケツのチャックをかけるのを忘れちゃだめよ、さあ、ボビー、ご本よ」とこまかい注意をしていた。

父は胸時計をコニーの前においた。「マダム・ベルナル(フランス近代の大女優サラ・ベルナル)、本日のご計画は？」

コニーは父に、茶化さないでちょうだい、わたしは真剣なのよ、と言おうとしたが、あいにく時計は八時四十分を指していた。

「あらたいへん！ どうしておしえてくれなかったの！」コニーは玄関のホールへ突進した。「ヴァルは、わたしが休むんだとおもうかもしれないわ！」そう言いながら、ブレザー・コートをつつかんだ。

「コニー、着てゆきなさい、今朝は冷えていますよ」と母は追ってきた。コニーは、ママったら、いつまでも世話をやきたがるのね、と言いたかった。「わたしのことで大さわぎするの、やめてちょうだい」

「帰りはおそいの？」

「たぶん五時頃。ドラマ・クラブの集まりがあるんですけど」コニーは、ふと母のもめんの普段着に目をとめた。そんな服装でさえも、母は、とても魅力的だった。スージーとわたしが、お母さんに似たことはしあわせだわ。

コニーは手を振りながら、いけ垣のかけに消えていった。

ミスター・フォスターは、妻のそばへきた。「あの子の頭にも、そろそろ分別をたたきこむ時がきたな。エイミー、きみもあのとしごろには、あんなふうだったかね？ まるで雲の中に住んでいるみたいじゃないか」

「そうね」彼女は折り靴を夫にわたしながら言った。「でも、コニーには、あまりきつくおっしゃらないで。十六才というのは、むずかしい時期ですわ」

三街区ほどさきで、ヴァレリー・パーカーがとび出してきて、コニーと歩調をそろえて歩きだした。彼女は、背が高く、どっしりしたからだつきであった。髪の毛は黒くて長く、前髪を切っていた。まろい、あいきょうのある顔をしていた。

「今朝はずいぶん遅いじゃないの？ この間の土曜日のお芝居のはなしでもしてたの？ あの時のイギリスの俳優、よかったものね」

ヴァルにそう言われると、コニーは、ブラウン先生から受けた重大な暗示を、いま、このオークデイルの町の間で、彼女に話してしまおうかしら、とためらった。コニーとヴァルがいつも打明けばなしをしあう場所は、彼女らの寝室にきまっていた。でも、このような秘密は、あまりスリリングで、とても胸にしまっておけるものではなかった。

「そうなの、あのお芝居が、わたしにとっては、いとぐちになったの。将来どの方向に進むかってことよ。そして今朝、眼がさめたとき、さったの」

「なにをさったの？」

コニーは、顔を秋の陽の光にむけて、昂然ともたげて言った。「わたしが将来すすむべき道をよ」

「あたしなんか、まだこんどんとしてるのよ」ヴァルは本を持ちかえながら言った。二人は通りを横ぎった。

「で、どういう方面なの？」

「ね、あんたもよく知ってるでしょうけど、ブラウン先生が、わたしに、何度も何度も朗読をあてて下さったり、『ドラマ・クラブ』へ入れて下さったりしたでしょう」コニーの眼は、いきいきとかがやいていた。「それで憶いだしたのよ、ジュニア・ハイでわたしが主役をやったとき、あの変わった人物の役をやって、たいへんなヒットしたことをね」

「それじゃあ、あなたは……」

「そうなの！」とコニーは大空にむかって叫びたいような衝動にかられた。そして、その気持をおさえるように、声はかえって、重々しく、ひくくなつた。「そうなの。わたしは女優になるつもりなの」

「まあ！ コニー！」ヴァレリーは、そう叫ぶと、本も何もかも一しょくたに、コニーに抱きついた。「あたし、うすうす知ってたのよ！」

「わたしたちが、あなたの家の地下室で、芝居ごっこをしたときのこと、おぼえてる？」コニーはなつかしそうに言った。「そして、わたしのバルコニーの場面に、古いピアノをつかつたわね」

ヴァルは、くすくす笑いだした。「あのとき、あたしのやったロミオだったらね。あの古い衣装はまだ物置にあるかしら」

コニーは腕をあげて言った。「わが無心の時代は終りぬ！」

彼女らが、交差点の信号燈の変るのを待っていると、男の子の一むれが、自動車で通りかかって、口笛を吹いた。「あれビートだわ」ヴァルは手をふった。「バッズもビートといっしょじゃなかった？」と、コニーを振りむくと、彼女は超然とした態度で言った。「わたしの目にうつるのは、前方にある、わたしのかがやかしい目標だけよ」

二人は学校のみえる通りに出た。高く白い、フットボールのゴールポストと、傾斜している緑の芝生のむこうに見える褐色の煉瓦の建物は、まるでうすくまっているようであった。オークデイル・ハイ・スクールである。いくつもの窓が、開け放されていた。あの内側のどこかで、ブラウン先生は、英語の講義の準備をされているんだわ。彼女は、「ヘイ、コニー」「おはよう、青目さん」などと言いながら追いぬいて行く男女生徒たちのことは、心にもとめなかつた。

二人は、石段をのぼり、ざわめいている廊下へはいった。コニーは、快い感慨にひたつた。いまに、わたしが有名になったら、ここへきて、ここはわたしが生涯のうちで、最も楽しい四カ年の歳月をすごした所だと、追想にふけることでしょう。

「ヘイ、コニーにヴァル、昼食のときに会おうね」赤い色と緑色のまじつた格子のスイーターをきたジーン・ヘグス



トロームが、二人のわきをとんで行った。「ジョン……」コニーは答えようとして振りかえったが、もう姿はみえなくなっていた。すると、こんどは、ちいさな、かわいいブロンド娘のルネ・スミスがきた。

「わずれずにわたしたちの席を取ってね！」

ジャケットを釘にかけて、コニーは、みんなと一列に並んでラテン語の教室へはいっていった。

ヴァルは、口の中で動詞活用をもぐもぐ暗誦していた。かわいいそうに、ヴァルはまだ将来の希望がきままっていないなんて、まったくお気の毒だわ！

コニーは四時間目の英語の時間がとても待ちきれない気持がした。

十一時。コニーはノートをばたっとしめた。ホーム・ルーム担任の、ミス・バブコックの歴史の授業がやっとすんだ。

「あなたは、今朝は特別にうれしそうですね」とミス・バブコックは言った。

まるで先生は心理学者みたいだわ、とコニーは思った。「わたし、うれしいんです」と言いながら、先生のそばをすりぬけていった。

ついに待望の、ブラウン先生の英語の時間がきた。

広い教室へ向うみちみち、コニーのひざはふるえていた。先生は、すてきなツイードのジャケットを着て、入口のところに立っていた。

「こんにちは、ブラウン先生」

「やあ、コンスタンス。マチネーの芝居はどうだった？」

「とってもよかったわ」

やはり先生は、心にとめていてくれたのである。

その時間じゅう、コニーは、まるで光につつまれているようであった。正午のベルが鳴っても、席から立ちとうとしなかった。

「わたしに何か話でもあるんですか？」

ブラウン先生は言った。

「いいえ、あの……」コニーは思いきって話した。「わたし、先生がオセロの独白をおよみになったとき、ほんとに感動しましたわ」彼の火をほくような声音が、彼女の耳の底によみがえった。

「ブラウン先生、わたし、先生のおっしゃったこと、よく考えてみましたわ。演技法をもっと真剣に研究するようにって、おっしゃったことです。例の劇のテストもぜひ受けてみますわ」そう言いながら、先生の上衣の襟の折返しのところ、すりきれているのを発見した。あたしにつくろわせて下さればいいのに……。

「けっこう」そう言うとき、彼は書類をとりあげて、ホールの方へ歩きだした。校内のカフェテリア(自分で食物をは)の入口でわかれるとき、先生はコニーに言った。「わたしは、才能のある学生たちを、激励するのが好きでしてね」

「コニーこっちよ」こみあっている食堂のむこうの端から、ヴァルが紙ナプキンを振っていた。コニーは、まだ頭がくらくらしていた。

「どうしたの？　ばかにおそかったじゃないの」ジーンがたずねた。

「ほんとよ」ルネはミルクのグラスを下に置いた。「あたしたち、心配してたのよ」

コニーはサンドウィッチのろう紙をはがした。「ミスター・ブラウンと会談してたのよ、例の食養生法では蚤だっで生きてゆけないって」

「あの先生に英語を教えてもらえるといいんだけどなあ。だっていちばんハンサムじゃあないの」とルネがそばへ寄りかかってきた。「四年生の人たちが、今朝、図書室であの先生のうわさをしていたのを聞かなかった？　奥さんがあるんだってはないよ」

コニーは両頬があつくなるのを感じた。

「ばからしい。先生がグレイ夫人の下宿屋に住んでらっしゃることは、誰だって知っているじゃないの」少しむきになつた口調で言った。

「コニー、顔がまっかよ」ジーンは笑つた。「さもありませんだわ」そう言われると、コニーは、ヴァルの眼くばせを無視して言葉をつづけた。「結婚なんかしてるもんですか」ブラウン先生は結婚しているようには見えない。わたしにはそれがわかる。と心の中でつよく言つた。

「その問題はさておいて、と」ルネは一同を見わたした。「あんたたちは、グレイス・デントンが、きのう、駆け落ちしたことを知ってる？ リー・フリップスとよ」

娘たちは一様に眼をみはつた。「ちっとも知らなかった！ 彼女は、ジョン・オールブライトとステデイの關係になつていたんでしょ？」

「二年もつづいたあとでね」そう言いながらコニーはミルクのグラスを乾した。「なんて馬鹿なことをしたんでしょね」

「男性のはなしのついでだけど、今日の午後のフットボールの練習をわすれないでね」

「ジーン、わたしは行かないわ、劇のテストをするのよ」コニーは本をとりあげて、はっきり言つた。

「それ、本気なの？」ジーンは、まっすぐな髪の毛をうしろへやりながら念をおした。

「生れて以来、こんなに本気になったことはないわ」コニーは言つた。

そのとき、肩幅のひろい青年が、二人の仲間を両脇にしたがえて、テーブルのところに立ちどまって声をかけた。

「きみたち、何でさわいでるんだい？」

娘たちのうわさ話は打切りになつて、紅棒やコンバクトが競争で使われた。

「ヘイ、ベイビー」パッツがコニーのうしろに立っていた。

「ハロー、パッツ」返事だけはした。彼がわたしの肩においた手はずしてくれればいいのに。まるでわたしを自分のものと思ひこんでいるのかしら。とコニーは思つた。

ジーンは、ボーイフレンドに笑いかけた。

そこへ、数冊の本をもった、背のひくい、骨ばった、やせた男生徒が来て、ヴァルの耳に、何かささやいた。「まあ、ピートったら」彼女は、しのびわらいをほじめた。

パッツは、いっそう、ちかちかとよりかかってきた。「きみは、今日はすてきた。とてもかわいくみえるね、コニー」
「ありがとう、パッツ」彼女は、恥ずかしそうにそうは言ったが、彼の息が首にかかるとはいやでならなかった。

アルはパッツの脇をつついた。「授業のはじまる前に、この公式をもう一度やりなおしてみようと言ったじゃないか？」

「ほくの忙しいのがわからんかね」フットボールの主将はそう言って彼を押しやった。

「忙しすぎて、これをやってる暇がないというのか？」ピートはパッツの腕にかかえている本をたたいた。「おい、六月に卒業する気なら、これくらい勉強しておけよ」

皿の音や生徒たちの声で、喧噪をきわめていたが、あわただしくベルが鳴りわたった。

「オーケイ、オーケイ、みんな行こうぜ」それから彼は、コニーに向って、やさしく言った。「ほくは、きみの来るのを待ってるぜ」

「お気のどくさま。今日はだめ。ドラマ・クラブの集合に欠席するわけにはゆかないの」

「女優さんになるという口実で、ほくを断わるのか？」彼は歩きだしながら投げキッスをした。「はやくやってこいよ。とにかく待ってるから」

コニーは、無言のまま、ヴァルとならんで廊下を歩いた。ほかの女の子なら、誰だって、パッツのステディと呼ばれたら、有頂天になって喜ぶだろう。だけど、わたしは、自分の天職の方が、ボーイフレンドより大事なんだわ

「やあ、コニー」ドラマ・クラブの幹部で悲劇役者の一人であるフレッド・ジャックスンが、ホールで彼女をよびとめた。「午後の集まりに来る？」

「ええ、ゆくわ。そして、テストに残るわ」